令和5年 10月1日（毎月1日発行） 赤十字新聞 第1001号 昭和24年9月30日 第三種郵便物認可

赤十字NEWS 10

OCTOBER.2023.#1001

Japanese Red Cross Society NEWS

10月は「里親月間」

子どもたちに、未来を

特集 ▶P. 2

CONTENTS

TOPICS

赤十字防災セミナーの新カリキュラムを開催
中学校の先生たちが避難所を疑似体験
日本は、世界で最大の「さい帯血移植」先進国 …… P. 4-5

連載

国内災害救護 まるわかり辞典 …… P. 4
輸血なるほど豆知識 …… P. 5

AREA NEWS

［埼玉］ “救える術を、一人でも多くの人に” Jリーグコラボで心肺蘇生講習
［千葉］ 首都圏を襲う直下型地震に備えよ 「九都県市合同防災訓練」に参加
［京都］ 4年ぶりの開催 医療体験キッズセミナーに地元小学生が参加 ／他 …… P. 6-7

WORLD NEWS

難民となって75年…パレスチナ難民への医療支援 …… P. 8

Present!!

SAIEN商品セット

プレゼント！
7名様

詳しくは P.7をCheck! ▶

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。

赤十字新聞 編集・発行／日本赤十字社 広報室 〒 105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL：03-3438-1311 一部 20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

SPECIAL FEATURE

特集

10月は「里親月間」です！

子どもたちに、未来を

毎年10月は、「里親月間」。日赤では、里親制度の理解を深め、一人でも多くの子どもたちに温かな養育が行き届くよう、啓発活動を行っています。今月の特集では、日赤岩手乳児院の里親支援相談員と、乳児院がサポートしている里親お二人にインタビューしました。

乳児院の活動は？

里親支援について

子どもたちにとって、ここは“おうち”。幸せな、家庭生活に近い日常を

日赤岩手乳児院では、さまざまな事情から保護者の養育を受けられない乳幼児を預かり、大切に育てています。ここで生活をしているのは、生後間もない新生児から4歳までの子どもたち。家庭生活に近い養育を目指して、リビングからキッチンで調理する大人の姿が見えるようにし、お食い初めなどのお祝いや季節のお楽しみ会を行い、「みんなの“おうち”」として幸せな時を過ごせるように工夫しています。また、岩手乳児院には専門の里親支援相談員がいて、里親のサポートや里親を希望する方たちへのアドバイスに力を入れています。

「里親さんたちの懐の広さや子どもを思う気持ちに支えられています」と山口さん

生まれてすぐに預けられ、4歳まで乳児院で育つ子もいます。どんなに普通の家庭らしく育てようとしても、乳児院の子は、思いがけないところで、家庭で育った子との違いが出ます。例えば、家庭で育った子は、勝手に他の子の自転車に乗ったりしませんが、乳児院の子は他人の自転車という認識がなく無断で乗ってしまいます。家庭や地域での経験が少ない、そのギャップを埋めるにはどうするか、里親さんと話し合いながら支援を進めていきます。

里親家庭に預けた後も、家庭訪問をして発達状況を確認し、里親支援は継続します。また、「里親サロン」を開いて、先輩里親さんの経験談を聞いたり、お互いの悩みを相談できる機会を設けています。里親サロンはコロナ禍で休止していましたが、ようやく春から再開しました。

私は学生時代にこの岩手乳児院で実習させてもらい、その際に、なんて温かい施設だろう、と感激しました。ここは「かわいそうな子たち」が生活している場所ではなく、温かい「おうち」です。乳児院の職員は、一番かわいい時期の子どもたちを喜んで育てさせてもらっています。

スタッフ STAFF

里親サロンも再開しました！

日赤岩手乳児院
保育士・里親支援専門相談員
山口 瞳さん

Profile
やまぐち・ひとみ ●大学卒業後、盛岡市社会福祉事業団を経て2016年から日赤岩手乳児院に勤務。実母の死と向き合った経験から、子どもの幸せにつながる福祉の仕事を希望し、昨年からは里親支援相談員として入所児と里親のご縁をつなぐ業務に携わる。

里親インタビュー CASE 1

高瀬さん

Family History

高瀬さん一家

岩手県在住。実子である長男と長女はすでに独立。現在は夫（里父）と、小学校4年生のYくん、3歳のKくんとの4人暮らし。Yくん、Kくんともに、それぞれが2歳のときに里子として迎え入れた。

2度目の子育てができてありがたい！里親サロンが心の支えになっています

里親になろうと思ったのは、40代前半のころ。結婚・出産が早かったので、子育ても落ち着いて、「まだまだやれるのに…」と感じたのがきっかけ。8年前に一人目（Yくん）を、昨年の春には二人目（Kくん）を迎え入れました。初めて里親になったとき、Yくんには嘘をつかないと決めて、「産んでくれたお母さんが別にいる」と伝えていました。「私が産んだのよ」と言えたらどんなに楽だろう、と思いながら…。Yくんが小学校1年生のある日、生まれ変わりの話をどこかで聞いたらしく、「僕、生まれ変わるときはママから生まれてきたいな」と。思わず「ママも生まれ変わったらYくんを産むよ！」と、感極まってしまいました。

二人目のKくんは、医療的ケアが必要な子。心臓の手術の影響で酸素を吸入しているので、幼い子たちの中で育てるのはリスクがあるため、児童相談所から養育を打診されました。医療的ケアが必要といっても、私にとっては、これまでの子育てと変わりません。子育てはいつだって大変です。それでも、子育ては楽しい！ 家族で一緒に遊び、お出かけするときに幸せを感じます。乳児院のサポートにも感謝しています。実子の子育てと違った難しさもあり、同じ立場の親同士で育児の悩みが打ち明けられる「里親サロン」は、とても大切な場所。今は、Yくん、Kくんに出会えて、子育てをさせてもらえて、ありがたい思いでいっぱい。里親にハードルを感じている人も多いかもしれませんが、短期の預かり制度など、関わり方はさまざま。興味があったら、ぜひ一歩を踏み出してほしいですね。

The Moment

（左）高瀬さん一家。Yくん・Kくんは実子であるお兄さん・お姉さんとも本当の兄弟のよう（中）足にも障害があるKくんを里父さんが背負ってハイキング（右）Kくんにお絵描きを教えるYくん

里親インタビュー CASE 2

菊池さん

Family History

菊池さん一家

岩手県在住。不妊治療を経て、里親として子どもを育てていくことを決心。5年前に2歳の女の子（Iちゃん）の里親に。現在は夫（里父）と小学校2年生になったIちゃんと3人で暮らす。

不妊治療を経て、里親になる決意を。子育てが自分を成長させてくれました

里親になるまでは、子どもを望んで、長い間不妊治療を続けていました。体にも負担が大きく、治療を断念したり、また再開したりという日々が続く中で、「血縁に強くこだわらなくてもいいんじゃないか…」という思いが生まれ、福祉相談センターに足を運んだのが始まりです。実親さんの意向もあり、養子縁組ではなく養育里親として2歳のIちゃんを預かりました。

初めての子育ては、想像していた以上に大変！10秒目を離せば器用に鍵を開けて外に出てしまうし、家中の引き出しや扉を開けては中身を全部出したり、時には、わざとじゅうたんに牛乳をこぼすなどの“お試し行動”が続きました。一方でIちゃんは、昼間は大暴れしても、夜に寝かしつけていると声も出さずにしくしく泣くんです。こんなに小さいのに、寂しさや、さまざまな葛藤と必死に闘っている…。大人の都合で私たちの元に来てもらったのに、投げ出すことはできないと思いました。それに、寝顔や甘えてくるときの彼女がとにかく愛おしくて！ 大事に思っている気持ちを伝えようと、毎晩「大好きだよ」と語りかけ続けました。あるとき、「私がおなかにいるとき、どんなだった？」とIちゃん。いつの間にか私が産みの母だと記憶が変わっていたのです。うれしさがあふれた一方で、真実を伝えなければ、と。真実を話すのは苦しかったですね。里親になってから、乳児院のアドバイスやサポートには何度も救われました。里親になれて、自分が成長させてもらっていると感じる日々です。

The Moment

（左）里子になったばかりのIちゃんと菊池さん（中）迎え入れてから、育児フォトブックを月ごとにまとめている（右）成長して落ち着いたIちゃん。フォトブックを見て、幼い自分が駄々をこねている様子に呆れているそう

Column | **1934年に誕生した日赤初の福祉施設**

1934年、冷害による大凶作に見舞われ、東北地方の人々は困窮を極めました。栄養不良のために命を落とす乳幼児が増加したことから、日赤の岩手支部は支部病院（現・盛岡赤十字病院）内に、乳幼児の保護を目的とした常設の保育園を開設。同園は後に日赤岩手乳児院と改称し、現在に至ります。

開設当時（岩手支部病院）

2023年現在（日赤岩手乳児院）

TOPICS

1 TOPICS

赤十字防災セミナーの新カリキュラムを開催
中学校の先生たちが避難所を疑似体験

日赤では災害時の避難所生活で困ることや運営の重要性を多くの人に知ってもらうために、ゲーム形式で学ぶ新カリキュラムをスタートしました。今回は、埼玉県の青少年赤十字に加盟する中学校で行われたセミナーをリポートします。

8月21日、埼玉県の川越市立砂中学校で赤十字防災セミナーが開催され、新カリキュラム**「ひなんじょ たいけん」**が実施されました。このゲームは、大規模災害を想定し、そのときに避難所で起こるさまざまな出来事を**「避難者の目線」**で疑似体験するものです。ゲームでは、避難所に見立てた平面図と、避難者や出来事を示したカードが配られます。5～7人のグループが役割分担をして、多様な年齢・健康状態・被災状況の避難者を、どこに、どうやって誘導するか、また避難所で直面する課題にどう対応していくかを考えていきます。日赤埼玉県支部の永瀬公彦 青少年・ボランティア課長は次のように語ります。「近年、大きな地震や風水害がひん発し、これまでにも増して防災意識の向上が求められています。**防災セミナーを通して、多くの人に災害時に求められる自助と共助の意識を高めていただくとともに、日赤のボランティアをはじめ、カリキュラムの指導者の養成も力を入れていきたい」**

当日は川越市立砂中学校の24人の教職員が参加（写真右奥が日赤埼玉県支部・永瀬課長）

今回のセミナーでは、学校の先生たちがグループワークに取り組みました。同中学校の野口千津子校長は、災害時には学校が避難所として活用され、教員が運営する立場になることをふまえ**「いつ訪れるか分からない“そのとき”に備え、避難所生活を実際にイメージすることで、子どもたちにも防災や自助と共助の重要性をしっかり伝えていきたい」**と話しました。日赤ではこのカリキュラムを活用し、全国で防災意識の啓発に努めていきます。

避難所に見立てた平面図に、世帯ごとに避難者の年齢や健康状態などが書かれたカードを配置していき、さまざまな出来事や課題に対応していきます

参加した岡部悠也教諭（写真中央）は、「避難所を具体的にイメージすることができた。また避難者の体の健康だけでなく、心のケアの大切さにも気づかされた」と話します

そのとき、日赤はどう動く!?

国内災害救護 まるわかり辞典

日赤の救護活動についてさまざまな角度から紹介するコーナー。

今回は**【救護活動に使用する救護所用テント&救護車両】**です。

日赤救護班は、災害時に被災地で救護活動を行うためにさまざまな資機材を備えていますが、医療機関が被災した地域や避難所の近くに医療機関がない地域などで被災者の診療を行う場合は救護所用のテントを設置します。現在、**エアテント174張、フレーム式テント117張、リフト式テント40張**の3つのタイプを全国で整備（2023年3月末時点）し、災害時に迅速な設置ができるよう平時から訓練を重ねています。エアテントは骨格となるフレームに空気を送り込むことで立ち上がるため短時間で設置することができ、フレーム式テントとリフト式テントはフレームに金属などを使用しているため耐久性が高いなどの特徴があります。

この他、救護班要員を被災地に派遣するための無線と衛星電話を搭載した通信指令車、救援物資を搬送するためのトラックなども整備し、被災地での迅速な救護活動を行う体制を整えています。

エアテント

フレーム式テント

リフト式テント

※日赤の救護所が分かるようにシンボルマークが表示されている。

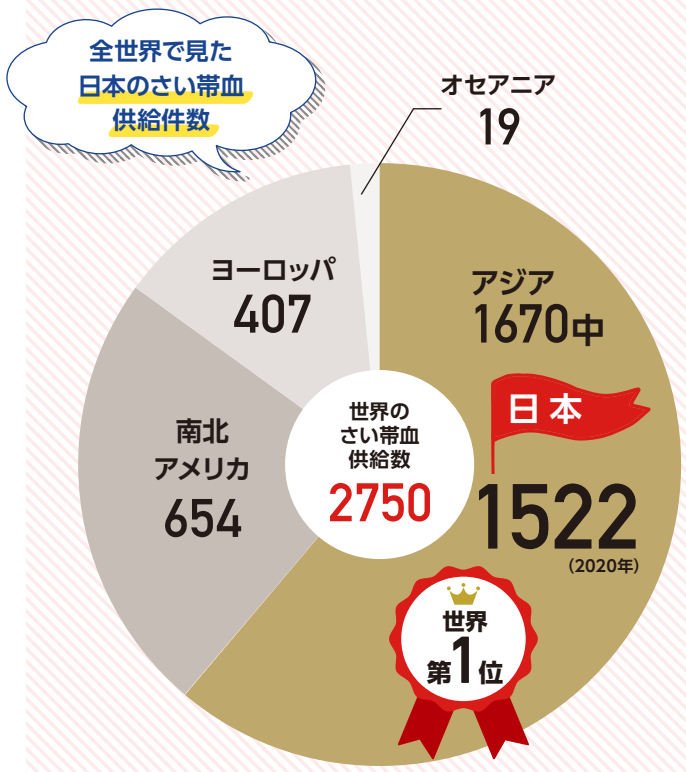
通信指令車

搬送用トラック

2 TOPICS

世界の供給数の半数以上が日本。人気テレビ番組でも紹介！

日本は、世界で最大の「さい帯血移植」先進国



出典：WMDA GLOBAL TRENDS REPORT 2020 / HPC Cord shipments per continent

さまざまな血液の病気の治療に利用される「さい帯血」をご存じでしょうか。「さい帯血」とは、お母さんと赤ちゃんを結ぶへその緒（さい帯）と、胎盤の中に含まれる血液を指します。この血液には、**血液を造るための造血幹細胞**が存在し、白血病や再生不良性貧血などの重い血液の病気の治療（さい帯血移植）に活用されています。

実は、この「さい帯血移植」において、日本は世界最大の実績があり、さい帯血バンクを介した移植*は、2021年3月に累計2万症例を超えました。また、**「さい帯血」は出産後に赤ちゃんとへその緒が切り離されてから採取するため、提供者の負担がなく安全**というメリットもあります。全国放送の人気テレビ番組もそれらのポイントに注目し、**「世界に誇る日本のさい帯血移植」**として紹介されました。

造血幹細胞は人工的に造ることができず、その細胞が存在する「さい帯血」はとても貴重ですが、出産時に処分されることがほとんど。また、年間で採取されるさい帯血は約2万本、そのうち移植に利用可能なものは約2500本と8分の1です。急速な少子化の進行に伴い、「さい帯血」の確保が難しくなっている昨今、安定供給を維持するために、「さい帯血」提供の協力を広げていくことが大切です。

日赤は1994年から「さい帯血」についての取り組みを開始し、**「さい帯血バンク」**を立ち上げました。現在は、全国に6カ所ある公的さい帯血バンクのうち、4カ所を日赤が運営しています。新しい命を育む血液が、別の誰かの命を救う「さい帯血移植」をこれからも啓発・支援していきます。

*非血縁者間の造血幹細胞移植

年間保存さい帯血

基準を満たしてわずか 1/8

基準を満たして保存されるさい帯血　約2500本

1年で採取されるさい帯血　約20000本

TV

日本テレビ系列『世界一受けたい授業』で紹介！

7月下旬放送の**「世界一受けたい授業」**で、さい帯血治療の解説と共に、日赤の関東甲信越ブロックさい帯血バンクの映像が紹介されました。

さい帯血バンクについて

「お母さんになられる方へ」（さい帯血の提供方法）や提携している産科施設について、詳しくはこちら→

さい帯血移植を受けた患者さんの声

詳しくはこちら

関東甲信越ブロック血液センターのさい帯血バンクでは、患者さんとドナーをつなぐ匿名のお手紙取り次ぎを実施し、さい帯血移植によって助けられた患者さんの感謝や喜びを分かち合える機会を広げています。

輸血なるほど豆知識

今回は献血から造られる「輸血用血液製剤」の種類と、それぞれがどのような治療に役立つか、またその使用期限についてご紹介します。

知ってる？ 血液から作られる輸血用血液製剤

献血者のみなさまにいただいた血液は輸血用血液製剤となり、病気の治療や手術などで輸血を必要とする患者さんのもとへ届けられています。輸血用血液製剤には、**「赤血球製剤」「血しょう製剤」「血小板製剤」「全血製剤」**があります。当初は採血されたままの血液、すなわちすべての成分を含んだ**「全血製剤」**の輸血が主流でしたが、現在では、患者さんが特に必要とする成分だけを輸血する**「成分輸血」**が主流となっています。**「成分輸血」**は、患者さんにとって不必要な成分が輸血されないため、循環器（心臓や腎臓など）の負担が軽減できます。医療機関への全供給数のうち、**「赤血球製剤」「血しょう製剤」「血小板製剤」**でほぼ100%を占めています。

赤血球製剤は、血液から血しょう、白血球および血小板の大部分を取り除いたものです。出血および赤血球が不足する状態、またはその機能低下による酸素欠乏のある場合に使用されます。

採血後28日間使用可能

血小板製剤は、成分採血装置を用いて血液の止血機能を持つ血小板を採取したものです。血小板の減少またはその機能低下による出血ないし出血傾向のある場合に使用されます。

採血後4日間使用可能

血しょう製剤は、血液から出血の防止に必要な各種の凝固因子が含まれる血しょうを取り出したもので、品質を保持するために採取後−20℃以下で凍結されています。複数の血液凝固因子の欠乏による出血ないし出血傾向のある場合に使用されます。

採血後1年間使用可能

全血製剤は、血液に保存液を加えたもので、大量出血などすべての成分が不足する状態で、赤血球と血しょうの同時補給を要する場合に使用されますが、現在では患者さんが必要とする成分だけを輸血する「成分輸血」が主流となったため、ほとんど使われていません。

採血後21日間使用可能

9月号の訂正・お詫び文　9月号の「輸血ヒストリー」に一部誤りがありました。謹んでお詫びし、訂正いたします。

（誤1）その中でもヒトの抗体であるD抗原は → 抗体と抗原が同一と受け取れる誤った表現
（正1）ラントシュタイナーとウィーナーが発見した抗原は、2人の頭文字を取りLW抗原と呼ばれています。
（誤2）現在国際輸血学会が認定しているヒトの血液型の数「37種類」→（正2）45種類　※2023年7月時点

なお、正しい記事全文は日赤WEBサイト、赤十字NEWSオンライン版でご確認いただけます。

オンライン版はこちら

AREA NEWS

エリアニュース

全国各地、あなたの生活のすぐそばで
日本赤十字社の活動は行われています。

埼玉 “救える術を、一人でも多くの人に” Jリーグコラボで心肺蘇生講習 手話応援デーにも参加

日赤埼玉県支部では、地元Jリーグチームとコラボした取り組みを実施。8月6日、4万人超の観客が訪れた浦和レッズの試合では、「#命つなぐアクション*」の一環として、心肺蘇生を学べるブースを初出展。多くの人に救急法を知ってもらう機会となりました。

8月26日の大宮アルディージャの試合は、“手話応援デー”。日本赤十字看護大学さいたま看護学生赤十字奉仕団と、埼玉県青少年赤十字卒業生奉仕団のボランティアたちが、「サッカー応援も、ノーマライゼーション」を合言葉に、障害のある人もない人も一緒にスポーツを楽しむことを目的に手話体験ブースを盛り上げました。

＊元プロサッカー選手・松田直樹さんが練習中に急性心筋梗塞で急逝したことを受けてスタート。救える命を一つでも増やすために、Jリーグ全体で啓発活動を展開している

千葉 首都圏を襲う直下型地震に備えよ「九都県市合同防災訓練」に参加

＊埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、横浜市、川崎市、千葉市、さいたま市、相模原市

千葉県を含む九都県市*には日本の人口の約4分の1（約3600万人）が暮らしています。政治・経済などの中枢機能が集積するこの地域で大地震発生の際の被害を最小限に食い止めるため、毎年開催されている本訓練。8月27日、千葉市会場の訓練には日赤千葉県支部が参加し、成田赤十字病院の医師や看護師が救護班として傷病者の救護活動を行ったほか、特殊救護奉仕団は無線による情報支援、エアーテントを用いた救護所設置の補助などを行いました。また、千葉県赤十字血液センターは非常時の輸血用血液製剤の搬送訓練も実施。そのほか、消防や自衛隊など、他機関とも連携した訓練となりました。

京都 4年ぶりの開催 医療体験キッズセミナーに地元小学生が参加

7月29日、京都第一赤十字病院では医療体験キッズセミナーを4年ぶりに開催、小学5・6年生、計78人が参加しました。このイベントは、医療への関心を高め、将来の医療を担う人材を育成するとともに、地域住民への貢献を図ることを目的としています。また、日赤京都府支部や血液センターの協力によって、赤十字の活動報告や献血に関する情報を提供するブースも出展。病院が保有するDMATカーや救急車の展示も行い、広く赤十字の活動を知っていただく機会となりました。

本物の医療機器に触れ、医師らの指導で扱い方を体験する子どもたちはもちろん、付き添いの保護者も熱心に見学し、活気あふれる時間となりました。

北海道 海辺の安全を守る！ 3きょうだいで水難救助員に

◀（左から）片井風雅さん、瑚乃葉さん、啓人さん
（※写真は2023年8月18日発行の函館新聞から）

函館西高校3年の片井風雅（ふうが）さん（17）が、8月上旬に行われた水難救助員の検定に合格し、すでに赤十字奉仕団で救助員として活動している兄・啓人（ひろと）さん（23）、姉・瑚乃葉（このは）さん（19）に続き、きょうだい3人そろっての資格取得となりました。風雅さんは兄・姉も所属する函館市地区水上安全赤十字奉仕団の60人目の団員です。函館水泳少年団で3人を幼少期から指導をしてきた同奉仕団の小山内稔委員長は「幼かった彼らが成長し、同じ奉仕団として活動するのはうれしい」と喜びもひとしお。今年、風雅さんは救助員デビューをしましたが、きょうだい3人そろっての活動は来年から。兄の啓人さんは「来年が楽しみ。僕たち3人の活動がきっかけになって、水難救助員という存在を多くの人に知ってもらえたら」と語りました。

岩手 群馬 福岡 青少年のための夏の赤十字活動が各地で

各地で、子どもや青少年向けのさまざまな夏イベントが実施されました。日赤岩手県支部（❶）は、青少年赤十字（JRC）加盟校の高校生を対象とした「赤十字インターンシップ」を開催。赤十字活動を積極的に学んだ生徒から「人道支援の幅広い活動を知った」などの感想が寄せられました。また、小学5・6年生の親子を対象に「親子サマースクール」も実施。世界平和や赤十字の活動を個人・グループワークを通して理解する機会となりました。

群馬県支部（❷）では、7～8月の間に、県内10地域でJRC地区トレーニング・センター（トレセン）を開催。そのうち2つの地域では、災害時における地域の危険箇所・安全箇所を洗い出し、地域の特徴をゲーム感覚で学べる「赤十字防災セミナー：DIG」を行いました。セミナー後、参加者は、「大雨・土砂災害では、早めに安全な場所に避難することが大事。災害への意識を高めていきたい」などと、気持ちを新たにしていました。

福岡県支部（❸）のトレセンでは、4年ぶりに3日間の宿泊研修を開催。県内の小中高校生、計50人が参加しました。研修中、指導者から行動指示はなく、それぞれが役割を決めて主体的に行動するトレーニングの中で、『気づき・考え・実行する』意識を高めました。

常任理事会開催報告

令和5年9月15日、令和5年度第5回の常任理事会が開催されました。
今回の常任理事会では、長期ビジョンモニタリングについて審議し、最近の海外での大規模災害への赤十字の対応について報告しました。

〈⑥ 10月号読者アンケート 質問項目〉

【A】 日赤の「会員」ですか
ア. 会員（年間2000円以上の寄付を継続している。但し、義援金を除く） **イ.** 会員ではない

【B】 赤十字の活動の中でよく知っている事業はどれですか
ア. 国内災害救護 **イ.** 国際活動 **ウ.** 赤十字病院
エ. 看護師等の教育 **オ.** 献血（血液事業）
カ. 救急法等の講習 **キ.** 青少年赤十字
ク. 赤十字ボランティア **ケ.** 社会福祉
※上記選択から**ア～ケ**の文字をご記載ください。複数選択可

【C】 今回、赤十字NEWSを読んで、赤十字の活動の中で理解が深まったのは上記**ア～ケ**の事業のどれですか
※複数選択可

【D】 赤十字NEWSの適切な大きさは
ア. 今のまま **イ.** A4サイズ
ウ. 小冊子（A5 148×210㎜）サイズ

【E】 現在の赤十字NEWSの読みやすさ
ア. 読みやすい **イ.** 読みにくい：その理由（文字量が多い/少ない、レイアウトが悪い、写真が多い/少ない、ページ数が多い/少ない）

【F】 赤十字NEWSの発行回数は何回がよいですか
ア. 月に1回 **イ.** 2カ月に1回 **ウ.** 3カ月に1回
エ. 4カ月に1回

【G】 その他、赤十字NEWSに関するご意見、ご要望

ハワイ、モロッコ、リビアなど災害被災地を支援 海外救援金*受け付け中！

＊各国の状況に応じて現地赤十字社・赤新月社や国際赤十字が行う救援・復興支援活動、防災・減災活動などに充てられます。

8月のハワイ・マウイ島の大火災、9月の北アフリカ・モロッコでの地震、そして同じく9月に北アフリカ・リビアで発生した暴風雨による洪水などにより、各地で深刻な被害が発生しています。日赤では被災地の人々を支援するため、災害ごとの救援金を募集しています。皆さまのご支援をお願い致します。

※詳しくは日赤WEBサイトをご確認ください。

洪水の被災地で捜索・救助活動を行う赤新月社ボランティア

受け付け中
現在、受け付け中の「海外救援金」はこちら ▶

国内災害義援金* 受け付け中！

＊義援金の募集については、被災都道府県の判断によるものであり、日本赤十字社はその判断に基づき、受け付けを実施しています。

「令和5年台風第6号災害（沖縄県）」と「令和5年台風第13号災害（茨城県、福島県、千葉県）」の被災地の方々を支援するため、義援金を募集しています。お寄せいただいた義援金は、全額を被災地の義援金配分委員会にお送りいたします。皆さまのご支援を心よりお待ちしています。

※詳しくは日赤WEBサイトをご確認ください。

受け付け中
現在、受け付け中の「国内災害義援金」はこちら ▶

Present!! 日常を取り戻すために…アマビエ マスキングテープに願いを込めて

パートナー企業 カミイソ産商株式会社

アマビエのマスキングテープ販売時の販売用チラシと売上金の一部寄付時の様子

1926(大正15)年、日本有数の“紙どころ”愛媛県四国中央市で創業したカミイソ産商株式会社は、着物を収納する衣裳文庫紙の製造から始まり、スーパーマーケット向けの販促ラベルやプレート、飲食店向けの雲龍和紙テーブルマット、コースター、今日ではマスキングテープやファンシーシール、メッセージカードなど、およそ100年の長い年月の間、紙にまつわる多彩な商品づくりに取り組んできました。

「誠実」「感謝」「思いやり」の経営を理念として、地元人材の積極採用や地域イベントへの協賛・寄付などの地域貢献活動をはじめとし、環境、人権、地域に根差したものづくりなど、SDGsへの取り組みにも力を入れています。

新型コロナウイルス感染症拡大時には、感染症が終息し日常生活を取り戻せるよう願いを込めて、疫病退散のご利益がある妖怪“アマビエ”をデザインしたマスキングテープを販売し、売り上げの一部を日赤愛媛県支部へ寄付。

また、同県支部への寄付による活動支援も長年続けています。

7名様 SAIEN商品セット

SAIENマスキングテープ、シールなどの詰合せセット

プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・WEBでご応募ください。
①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS10月号を手にされた場所（例／献血ルーム） ⑥10月号読者アンケートの回答（質問項目は右上の赤枠内）
※ご応募いただいた個人情報はプレゼントの発送および弊社からのお知らせのみに利用いたします

郵送／〒105-8521東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS10月号プレゼント係
WEB応募／右の2次元コードからご応募ください。
10月31日（火）必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

ご応募はこちらから

WORLD NEWS

―ワールドニュース―

レバノン共和国ってどんなところ？

1948年に起きた第1次中東戦争により、多数のパレスチナの人々が故郷と家を失い、周辺諸国に逃れました。その一つ、レバノン共和国の人口は約529万人。長年にわたってパレスチナ難民を受け入れてきた国の一つで、現在、国内には12カ所の難民キャンプが存在し、48万人以上が暮らしています。

難民となって75年…パレスチナ難民への医療支援

日赤は、レバノン国内のパレスチナ難民キャンプ内外で、パレスチナ赤新月社が運営する5カ所の病院に対し、さまざまな支援を実施しています。今回は、レバノン北部に位置するサファッド病院で医療技術支援に携わる、福岡赤十字病院 医師の松田圭央（まつだかおう）さんに話を聞きました。

松田さんがレバノンで携わる医療支援事業とはどのようなものでしょうか。

日赤は、レバノン共和国で2018年4月からパレスチナ赤新月社への医療支援事業を開始し、現在、第2期目として事業を展開しています。本事業は、同赤新月社が運営する5つの病院に日赤の医師や看護師を派遣し、現地の医療従事者へ技術指導を行うことで、医師の診断能力や看護実践の質の向上、感染症への対応力の強化、傷病者の受入体制の構築など、安定した医療の提供を目指しています。

どのような技術指導をしているのでしょうか。なぜ、そういった支援が求められているのでしょうか。

主には、現地医師のミーティングや回診に参加し、その都度ディスカッションを繰り返しながら、知識のアップデートを図っています。基本的に、サファッド病院で働く医師や看護師のほとんどがパレスチナ難民です。一方で、レバノン国内でパレスチナ難民は戸籍の作成や財産の所有が認められておらず、職業選択の自由もなく、パレスチナ難民が医師になる機会がありません。現在キャンプ内の病院で医療に従事する医師のほとんどは、海外の大学で学び、医師免許を取得した人材です。医師になるため海外留学を望んでも、移動に制限があるため、家族を連れていくことができず、留学を断念せざるを得ないこともあって、医師の確保は困難です。現地医師や看護師の知識や経験にもばらつきがありますが、私は主に医師への超音波検査機器の取り扱いと検査技術の向上を目指して活動しています。

近年は、2020年のベイルート港爆発災害や、今年のトルコ・シリア地震を受けて、多数の傷病者の受け入れ体制の構築や災害トリアージのニーズがますます高まっています。一方で、WHO（世界保健機関）が定める医療行為を安全に行うためのガイドラインを知らない職員もおり、医療リスクが潜在している中で業務にあたるケースもありました。現地の医師たちがそもそも何を知らないのかを把握し、ガイドライン遵守の必要性を認識できるように支援していくことも大切だと思っています。

現地でパレスチナ赤新月社のスタッフとの活動中、印象深い話があれば教えてください。

パレスチナ赤新月社の医療従事者の中には、情熱を持って新しい技術を身につけようとする若い医師もいれば、小言が多いものの、診察への同行を快く受け入れてくれるベテランの医師もいます。医師としてのスキルや背景はさまざまですが、総じて言えるのは、彼らは皆、心温かく、愛情深いということですね。派遣前はイスラム文化圏における女性医師の立場に不安がありましたが、サファッド病院には3人も女性医師が活躍しており、快く迎えてもらえたと思います。女性患者にとっては、腹部診察やエコーもリラックスして受けてもらえたようですし、質問もしやすいようで安心しました。

ハッとさせられたのが、通訳を担当する26歳のアマルさんの言葉。「あなたたちは私たちのことを『難民』と呼ぶでしょう。私が生まれたレバノンでは外国人とみなされています。生まれたときから難民として生きているって不思議ですよね」。多くのパレスチナ難民が故郷を失った75年という年月の間、世代が受け継がれ、生まれたのが難民キャンプだったというだけで多くの制限が課されている彼らの気持ちについて、何も理解していないことに気づかされました。

読者の皆さんにメッセージをお願いします。

救急外来で搬送された8歳の男の子の母親から「この子は日本だったら回復できたのでしょうか」と尋ねられたことがありました。パレスチナ難民ではなく、日本で生まれていればもっと健やかに過ごせたのではないかと彼女が思ったのかもしれない、と考えると胸が締めつけられました。彼や彼女の人生が私の人生だったのかもしれないと想像してみてください。そうすることがパレスチナ難民を世界から忘れられた存在にしないことにつながると思います。

松田 圭央
（まつだ・かおう）
福岡赤十字病院 医師

2023年7月からレバノンに派遣され、パレスチナ赤新月社医療支援事業に従事。パレスチナ赤新月社がレバノン国内で運営する病院への医療技術支援を担当している。

医師の院内回診に同行し、患者について医師団とディスカッションする松田医師（写真右）

パレスチナ赤新月社のサファッド病院で医師に超音波検査の技術指導をする松田医師（写真右）

現地医師の男性看護師と女性医師の触診を見守る